

## 今週の為替相場見通し(2017年7月31日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		110.55 ~ 112.21	110.72	108.00 ~ 112.00
ユーロ	(ドル)		1.1613 ~ 1.1777	1.1746	1.1600 ~ 1.1900
(1ユーロ=)	(円)		128.88 ~ 130.60	130.08	128.00 ~ 131.50
英ポンド	(ドル)		1.2990 ~ 1.3159	1.3135	1.2950 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	144.03 ~ 146.56	145.37	143.50 ~ 146.50
豪ドル	(ドル)		0.7877 ~ 0.8066	0.7985	0.7850 ~ 0.8200
(1豪ドル=)	(円)	*	87.65 ~ 89.43	88.40	87.00 ~ 91.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

### 1. 米ドル

為替営業第二チーム 橋 雄史

(1)今週の予想レンジ: 108.00 ~ 112.00 円

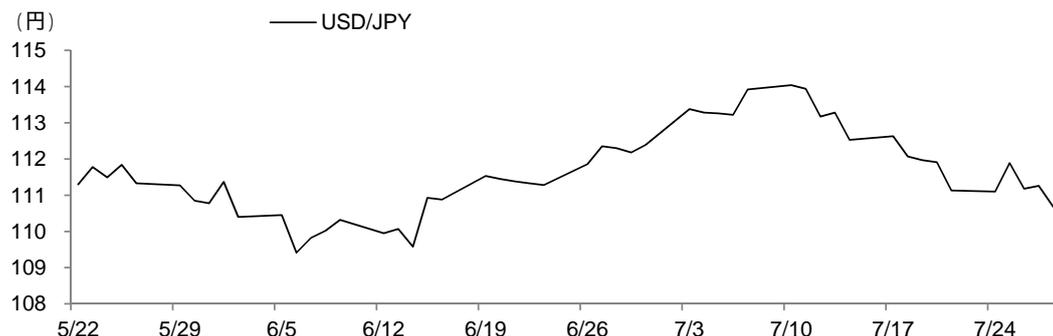
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は上値重く推移。週初24日に111円台前半でオープンしたドル/円は、前週末からのドル売り優勢地合いが続く中、一時110.63円まで下落。しかし、FOMCを控えたポジション調整の動きから米金利が上昇したことなどを背景に111円台を回復した。25日は日経平均株価が下落する動きにドル/円も一時111円割れまで弱含んだが、米株が高く寄り付いたことや、米7月消費者信頼感が4か月ぶりに改善したことを受けて111円台後半まで上昇。さらに米上院が医療保険制度改革(オバマケア)廃止へ向けた動議を可決したことを受けて、トランプ政権の運営に対する不透明感が和らぎ、ドル/円は112円台手前まで上伸した。26日には米金利が上昇する展開に週高値となる112.21円をつけたが、FOMC声明文において物価情勢への評価が下方修正されると、ドル/円は111円台前半まで急落。27日はスポット末日にあたることから本邦実需勢による円買いフローが入り110円台後半まで値を下げたが、その後は米金利が上昇し、米6月耐久財受注が予想を上回るとドル/円は111円台後半まで反発。28日は米4~6月期GDP(速報値)の結果が予想を下回ったことや北朝鮮のミサイル発射報道を受けて地政学リスクの高まりが意識されると、ドル/円は週安値となる110.55円まで下落し、結局110円台後半で越週した。

今週のドル/円相場は引続き上値重い展開を予想する。足許のドル/円相場は軟調推移が継続しており、要因としてはFRBの利上げ期待の低迷が背景にある。ECBをはじめとして、各中央銀行が緩和縮小や利上げ実施に向けた地ならしを強める中、相対的にドルの魅力が薄れた格好となり、ドルインデックスは年初来安値を更新中。今週4日(金)は注目の米7月雇用統計の発表を控えるが、市場の関心は労働市場よりもインフレ指標に集まっており、雇用統計結果が大きく上回らない限り、ドル売りの流れが継続することが予想される。またドル/円は108円~114円の範囲内で大きなレンジ推移を形成しており、足許サポートされている110円台を下回った場合には、108円台までの下押し圧力も相応にかかることが予想される。日米の企業決算動向は好調基調を維持しており、実体経済はしっかりと成長している印象も感じるが、本邦の閣僚辞任等で政治リスクが不透明な状況も継続しており、方向性としてはダウンサイドを意識した展開を予想したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/24~7/28)の値動き: 安値 110.55 円 高値 112.21 円 終値 110.72 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1900 128.00 ~ 131.50 円

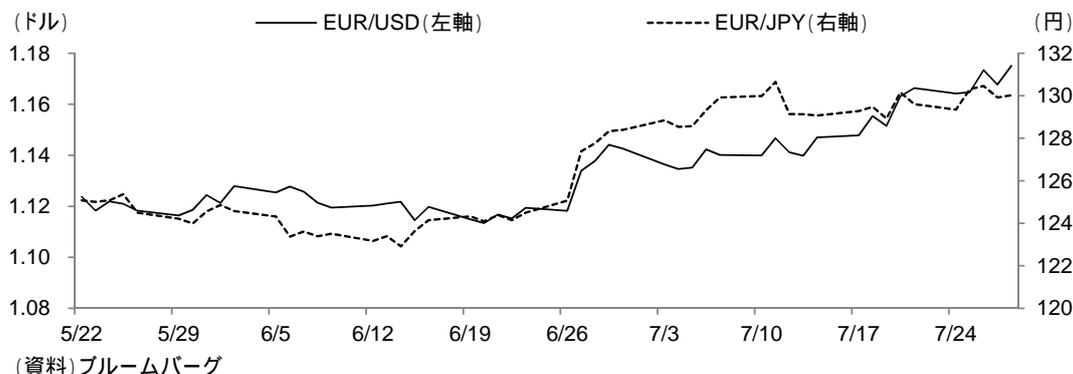
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロは対ドルではFOMC後に急騰、その後は反落する場面も見られたが、週を通して上昇し、対円でも底堅く推移した。24日、1.16台半ばでオープンしたユーロ/ドルは、アジア時間こそ安倍内閣支持率低下を嫌気したドル/円下落を眺めながら1.1684まで上昇。しかし、欧州時間に発表されたドイツ、フランスなどのPMI指標が総じて冴えない結果となったことを受け、反落。北米時間ではドル買戻しの流れに1.1626まで下落した。ユーロ/円はユーロドル下落につられ129円台後半から一時、128.88円まで急落後、ドル反発に129円台を回復。25日、アジア時間、ユーロ/ドルは1.16半ばで小動きした後、独7月Ifo景況感指数が強含み、北米時間にユーロ/円主導で1.1712まで上昇するも、良好な米経済指標を受けた戻り売りに往って来い。その間、ユーロ/円は130.58円まで値を伸ばした。26日、アジア時間はFOMCを前に1.16台前半で揉み合い。FOMC前にノボトニーオーストリア中銀総裁の「デフレリスクを考慮した政策を再考すべき」とのコメントにユーロ/ドルは1.17ちょうど付近まで急伸。FOMC声明文がややハト的に解釈されると、1.1740レベルまで続伸した。その間、ユーロ円は週高値となる130.60円まで上昇した。27日、前日の流れを引き継ぎ、ユーロ/ドルはアジア時間に週高値となる1.1777まで買い進められるも、欧州時間以降は利益確定の売り優勢となり1.16台半ばまで押し戻された。ユーロ/円はユーロ/ドルの戻り売り基調に130円台半ばから1円程度下落した。28日アジア時間、ユーロは押し目買いが先行。北米時間には低調な米雇用コスト指標を受け米長期金利が低下したことや北朝鮮のミサイル発射の報道にユーロ買いドル売りが強まり一時、1.1764まで上昇した。一方、ユーロ/円についてはユーロ/ドルの上昇よりもリスクオフの円買いの動きとなり130円台半ばから130円ちょうど近辺まで軟化した。

今週のユーロ相場は底堅い推移を予想する。今週は米7月雇用統計を筆頭に米国で重要経済発表が相次ぐ。足元、対ユーロのみならず、豪ドル、英ポンド、カナダドルなどに対してドルは大きく売られていることから、良好な数字が出ればドルのショートカバーが起こり、ユーロ/ドルは年初来高値圏から押し戻されそうだ。しかしながら、市場の欧州中央銀行(ECB)のテーパリングに対する思惑は根強いものがあり、落ちたところは絶好の買い場とされ下値は限定的か。米経済指標に弱いものが連続した場合には、素直に先週の直近高値をトライする動きとなりそうだ。北朝鮮を巡る地政学リスクが依然として燻っていることから円買い需要もあり、ユーロ/円についてはやや下値警戒感が強く上値の重い展開を予想する。欧州の経済指標としては、31日(月)ユーロ圏7月消費者物価指数(HICP、速報)、1日(火)ユーロ圏4~6月期GDP(1次速報)などが発表される。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/24~7/28)の値動き: (対ドル) 安値 1.1613 高値 1.1777 終値 1.1746  
(対円) 安値 128.88 高値 130.60 終値 130.08



### 3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.2950 ~ 1.3200 143.50 ~ 146.50 円

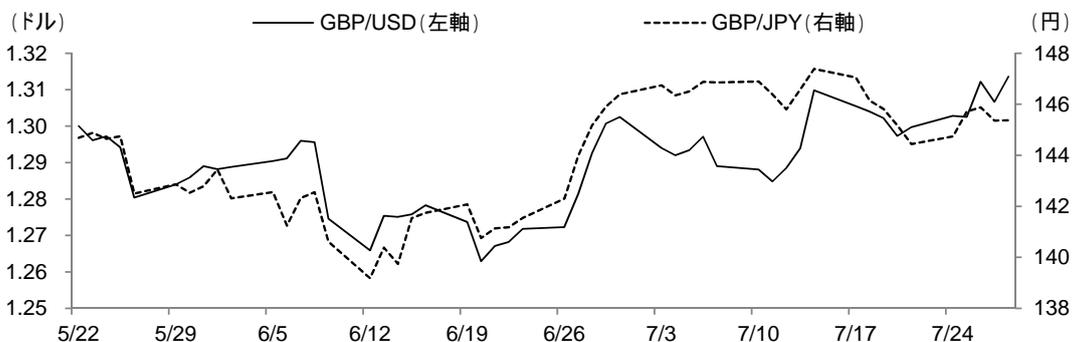
(2)ポイント[先週の回顧と今週の見通し]

先週の英ポンド相場は、予想に反して上昇。対ドルで従来心理的な上値と見られていた1.30水準を底値に堅調を維持し、27日までに35か月ぶりの高値を更新する1.3159まで上伸した。ただし、ポンド/ドルの週引けに掛けての堅調は、並行して進んだ対ユーロ、対円でのポンド軟調が物語る通り、ポンド側に買い要因があったと言うより、ドル全面安の一環と位置付けられた。週前半のポンド堅調は、25日に予定された英中銀金融政策委員会のホールデン委員の講演を前に、6月21日の同委員発言(「金融引き締めが「早過ぎ」になるリスクは縮小した」)のような利上げに積極的な発言が聞かれる可能性が警戒されたことが要因視された。結局、同委員の講演の内容は伝えられなかったものの(後述)、特に対円などで、その後もポンドの堅調は続いた。「タカ派発言期待」という漠然とした材料以外に、ポンド買いの理由は見当たらなかったし、26日に発表された英4~6月期GDP速報値は市場予想に沿った内容で、実のところ、前後してのポンド堅調の要因ははっきりしなかった。26日北米時間午後のポンド/ドル上昇は、上述の通りドル全面安の結果。その時間に発表された米連銀公開市場委員会の声明が、物価上昇に対する警戒感を緩めたと読まれたことがきっかけとなった。逆に27日のドル反発局面では、米金利上昇が材料視されたと言うが、金利上昇もドル高も長続きはせず、週引けに掛けて再びドルは全面安に振れた。この局面、ドルのポンドに対する反発は、ユーロや円に対するそれに何故か遅れた。結果、対ユーロ、対円でポンドは一瞬上昇、それぞれ週の高値を付けることになったが、ほどなく他通貨の(対ドルでの)下落に追いつく形で反落した。

今週の英ポンド相場は、下落を予想。注目は3日(木)に結果が発表される英中銀金融政策委員会。8月は議事録に加え、四半期インフレ報告書も同時に発表される注目の月。一部に基準金利引き上げを見込む向きがないでもないが、据え置きはほぼ間違いないものと見込む。まず確認したいのは票読み。前回(6月に)利上げ票を投じたサンダース委員、マカフェティ委員(フォーブス委員は退任)に加えて新たに利上げ票が投じられるどうか興味深い。仮に利上げ票が増えれば、今後も英中銀利上げ観測がポンドが上昇する局面の「言い訳」に使われようが、逆に2票以下にとどまれば、急速に早期利上げ観測は沈静化、ポンドの反落余地を広げるのではないかと見込む。そもそもこの間のポンド堅調は、米追加利上げ観測の後退やトランプ大統領の経済政策運営に対する失望などを材料視したドル安の色彩が濃く、ポンド側に明確な上昇要因があつての値動きではないと位置付ける。英のEU離脱交渉も、EU側の硬直的な姿勢を崩すには、英側から具体的に合理的な交渉案を提示する必要があるはずだが、これまでの交渉で明らかになった通り、英側は政権内部の確執で意見の統一もままならない。ここにきて移行期間(2019年3月の離脱から離脱後の通商関係などを規定した将来協定発効までの)設置の必要を、漸く離脱派も認めるようになってきたものの、いかにせん、議論は緒に就いたばかりで、移民の扱いや人権問題(欧州司法裁判所の権限範囲)に関して英政府には素案すら存在しない。アイルランドと北アイルランドの国境に関して、離脱投票後1年余りを経て、漸く具体的な議論が始まったばかりで、今後も迅速な交渉の進展はとて期待できない。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/24~7/28)の値動き: (対ドル) 安値 1.2990 高値 1.3159 終値 1.3135  
(対円) 安値 144.03 高値 146.56 終値 145.37



(資料)ブルームバーグ

#### 4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7850 ~ 0.8200 87.00 ~ 91.00 円

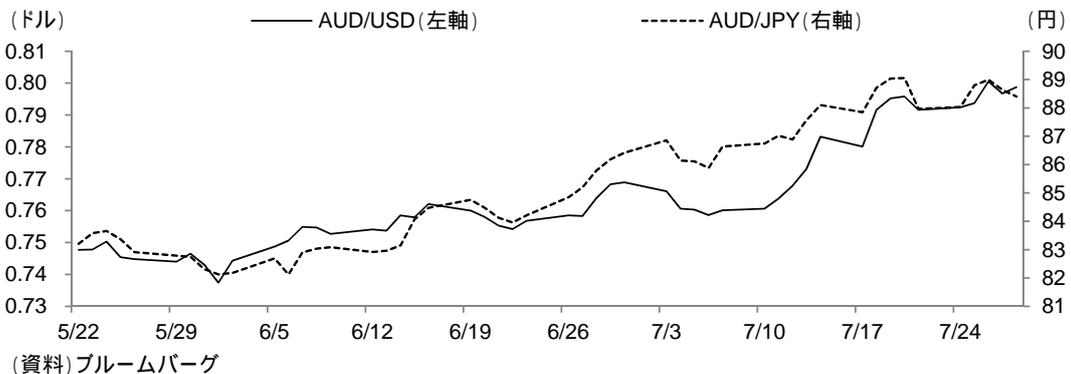
(2) ポイント(先週の回顧と今週の見通し)

先週の豪ドル相場は、上昇する展開。週初24日、0.79台前半でオープンした豪ドルは、特段目立った材料が無い中で横ばい推移。その後、クシュナー米大統領上級顧問がロシア当局者との接触を認めたことでロシアゲート問題が意識される中、豪ドルは一時0.79台半ばまで上昇するも積極的に上値を追う展開とはならず0.79台前半まで値を戻した。25日、商品価格が堅調推移する中で豪ドルは0.79台前半から0.79台後半まで上昇。しかし、その後発表された米7月米消費者信頼感が市場予想を大幅に上回り、2000年以降で2番目の高水準となる良好な内容となると、ドル買いが強まり豪ドルは0.79台前半まで反落。26日、注目された豪4～6月期CPIトリム平均は市場予想通りとなるも、総合CPIは市場予想をやや下回る結果。その後行われたロウ・豪州準備銀行(中央銀行、RBA)総裁による講演では、最近の上向き傾向にある労働市場を歓迎する一方で、賃金の伸び悩みと高水準にある家計債務を懸念する中で引き続き政策金利を長期的に低位に維持するとの認識を示した。豪ドルはこれらを受けて、じり安の展開となり一時週安値となる0.7877まで軟化。米FOMCでは、大方の予想通り政策金利が据え置きとなるも足許の低調な物価動向への懸念が示されたことで市場参加者がハト派と解釈すると、ドル売り圧力が強まる中で豪ドルは0.80台前半まで急騰する展開。27日、前日からのドル売り優勢地合いが続く中で豪ドルは一時週高値となる0.8066まで上昇。その後は、米金利の上昇を背景にドル買いが強まる中で豪ドルはじりじりと値を下げる展開。発表された米経済指標が良好な内容となったことも相俟って、豪ドルは0.79台半ばまで反落。28日、特段材料の無い中で豪ドルは0.79台半ばから後半で揉み合う展開。その後、注目された米4～6月期GDP(速報値)が市場予想をやや下回る内容となるとドル売り優勢となり、豪ドルは再び0.80台を回復。その後はやや値を戻すも、結局豪ドルは対ドルで0.79台後半、対円では88円台前半で越週した。

今週の豪ドル相場は底堅い展開を予想。米国では、引き続きロシアゲート問題が尾を引く中で、米上院での再審議入りが可決されたヘルスケア法案は再び否決される結果となり、トランプ政権の先行き不透明感は一段と高まっている。先日のFOMCではバランスシート縮小の早期開始が示唆される一方、近時の低調なインフレ指標に対するハト派な文言が示され、足許でドルが積極的に買われる展開は考えづらい。先日のロウ総裁による講演では、引き続き政策金利を低水準に維持する必要があるとの認識が示され、足許で高まりつつある市場参加者の利上げ期待をやや牽制する格好となったが、労働市場が堅調に拡大しているとの認識も示され、過度に利上げ期待を後退させる展開には至っていない。足許の物価動向も概ね市場予想通りとなる中、サウジアラビアの一段の減産に対する期待感を背景に堅調推移する原油価格を始め商品価格が底堅く推移する状況下、堅調推移を続ける豪ドルが一方的に売られる展開は考えにくい。先週は一時的にVIX指数が上昇する場面はあったが、基本的に低推移を続けている中、リスク回避ムードが高まる雰囲気も感じられない。そのため、今週の豪ドル相場も引き続き底堅い展開が続くと予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(7/24～7/28)の値動き: (対ドル) 安値 0.7877 高値 0.8066 終値 0.7985  
(対円) 安値 87.65 高値 89.43 終値 88.40



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。